

遺伝子組み換え作物採択に対するサイエンスコミュニケーションの効果の解析 1160269 山下留奈

Study on the effects of science communication for adoption of genetically modified organisms

Runa Yamashita

近年、遺伝子組み換え作物 (Genetically Modified Organisms) など従来は選択肢になかった科学技術産物の選択が可能になった。これらは長い時間と膨大な研究費の投入の成果であるが、十分に斟酌されることなく日常生活の選択肢から排除されているように思われる。受け取り側の科学技術に対する知識不足が主因の可能性もある。知識量の差を埋めるだけでなく、科学技術に対する意識を向上するために、サイエンスコミュニケーションが社会の様々な場面で展開されている。自らがサイエンスコミュニケーターとなり、**GMO** に対するサイエンスコミュニケーションの効果を検証した。大学生や主婦層に向けて、遺伝子組み換え技術や **GMO** について説明し、消費者向け **GMO** である「花粉症緩和米」の紹介を含めた発表を行った。その前後で同一項目を含めたアンケートを実施した。その結果、**GMO** に関する理解、関心、意識が「深まった」と回答したのはそれぞれ全体で 71.9%、52.5%、47.8% となったことから、理解に関しては効果があったと言える。関心と意識の変化が少ない一因としては、元の「**GMO** に関する興味や関心の度合い」が低いことが見られた。また、特に主婦層においては「**GMO** を購入する可能性」、「花粉症緩和米の選択可能性」に関してあまり向上を図ることができなかった。より効果的にするには、対話するコミュニケーションが必要だと考える。